

# 米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 90

## 水をめぐる争い

— まいばら水の歴史① —

### 出雲井と三度水

かつて姉川には、伊吹の集落から長浜市東上坂町までの間に二〇か所の井堰が作られていました。木造だったために洪水のたびに流されたり、渇水期には上流の井堰が水を独占したりとさまざまな問題を抱えていました。

なかでも米原市大原地域(大原郷)や長浜市郷里地域(郷里庄)の命ともいえる出雲井は、大雨ごとに土砂が流れて堰を埋め用水が途絶えたり、姉川最上流の伊吹地先に設けられた井堰であることから、下流井堰との争いなど数々の争論を引き起こしてきました。郷里庄へ分水する井之口分水では、日照りが続くと同下流の村が井を切りに来たために、村人たちが大急ぎで井を止めに出たといえます。昭和八年の水争いは近年では最も大きなもので、二か月を越える日照り

が続いたため、水不足に苦しんだ長浜市相撲庭町の人たちが出雲井を壊

したことから騒ぎが大きくなり、愛知郡以北の警察官ら三百人が警戒に当たりました。昭和二五年のジェーン台風で出雲井はじめ下流の二〇近い井堰のほとんどが壊滅したことから、二九年に姉川合同井堰が完成し、伊吹・大原郷・相撲庭・郷里庄の積年の対立は解消しました。

また、中世以降、三度水という分水の慣行がありました。これは、出雲井下流の郷里庄から依頼があれば、六月以降三度にわたり、日数七日を隔てて一日一夜あて出雲井を切り放し、郷里庄に用水の特別融通をする制度です。郷里庄の村々は、出雲井取水口に鎮座する伊夫岐神社(伊吹)の氏子でもあり、いまでも数か村の代表者が秋祭りに参集されます。

### 隣村との水争い

用水に関する争いは、出雲井のように井元の伊吹と下流の大原郷や郷里庄のような広域なものほかに、かつては隣村同士の争いがあったことがよく語られます。例えば、湯壺湧水は湧水地が須川で、川となつて大野木に流れているためにかつて両集落の間で水争いがありました。黒田川の水を利用する北方と大鹿、山室も水の少ない地域で、田用水確保のために水争いが絶えなかつたよう

で、一晚中水の見張りをするなど田用水確保に苦労しました。さらに、

米原市の多くの集落は、近世彦根藩領に属しますが、大和郡山藩領などの他藩や旗本領の村々も多く、水争いの調整に多くの苦難と月日を要しました。出雲井用水に係る大原郷の内、天満・朝日・夫馬・池下は彦根藩以外の領分になっていて経済的・政治的に不利な状況にあつたことから、いまでも、中世以来の由来や訴状を収めた「大原四ヶ村共有文書」を輪番で大切に保管されています。

市域南部を縦断する天野川に合流する河川は、いずれも谷が浅く、水量に乏しいのですが、

一旦豪雨に見舞われると鉄砲水となり氾濫します。山東地域南部は干害と水害の両方を受けやすい地域でした。ここでも、天文元年(1532)に黒田氏によって開かれた「お方井」を巡る水論があり、長岡と志賀谷の分水地点では、それぞれが見張り番を立てていました。また、西山を水源とすることから、毎年農繁期前には志賀谷と加勢野から「湯立て料」が納められていました。おなじような事例は、川戸川の水利権を巡る寺林と上平寺・藤川にもみられ、水論を平和裡に収める慣例です。

(歴史・文化財保護室)



▲ 水争いで使われたワラの兜